

氏 名 川村 千鶴子

学位(専攻分野) 博士(学術)

学位記番号 総研大乙第 220 号

学位授与の日付 平成25年3月22日

学位授与の要件 学位規則第6条第2項該当

学位論文題目 多文化都市・新宿の生成と展開ーライフサイクルの視座ー

論文審査委員 主 査 教授 庄司 博史
准教授 陳 天璽
准教授 南 真木人
教授 町村 敬志 一橋大学
教授 竹沢 泰子 京都大学
名誉教授 中牧 弘允 国立民族学博物館

論文内容の要旨

本論文の目的は、日本で最も早期に外国人の居住者を受容してきたと思われる東京都新宿を対象として、多文化化・多民族化・多国籍化の歴史的変遷と多様な移民を受容する都市の生成と展開を明らかにすることである。移民を受け入れる地元住民の人生と移民や難民の人生が互いに相互に影響しあい、次世代へつながっていくのかに焦点をあて、分析視角として「ライフサイクル（人生周期）の視座」という新しい枠組みを提示した。それは時間軸に沿って聴取したオーラル・ヒストリーに基づき、人間の誕生から幼児期、学童期、青年期、キャリア形成期、壮年期、老年期に対応して、人の生の営みを包括的に分析する手法である。日本における移民・難民の包摂がいかなる内実を伴うのか、多文化都市の諸条件とは何かを検証し、「多文化都市・新宿」というテーゼを論証した。

「第1章 新宿の原風景と人間の誕生」では、新宿が戦後、焼け野原となり GHQ が置かれたことを多文化都市の原点と見据え、性労働、在日コリアン女性の出産、非正規滞在の外国人女性の出産など人間の誕生に関わる事例を記述した。併せて、そうした女性を保護し支援する日本人が、公私を問わず様々な機関のなかに生まれ、多文化間医療の発達や医療通訳の整備などが推し進められてきたことを論じた。

「第2章 幼児期と学童期のアイデンティティ」では、アイデンティティの基底となる幼児期から学童期に関して、移民や難民の子どもたちが新宿の公立保育園や NPO、夜間保育園などで共に育ち成長している実態を描き、地域住民や保護者のあいだにも多文化意識が徐々に芽生えてきた過程を記述した。

「第3章 学歴格差と基礎教育の保障」では、いじめや日本語力不足で不登校になる移民の子どもの実態や基礎教育を受けていない子どもの存在に着目し、受け皿となっている NPO や夜間中学の取り組みを記述した。そこで学ぶ、不就学で読み書きができなかった高齢期の在日コリアンの事例も報告し、所得格差による学歴格差と基礎教育のあり方を考察した。

「第4章 遊び憩う時空の創造」では、移民にとって憩い、娯楽の場、安心の居場所が重要であることを指摘し、そのひとつの成功例として、民間ボランティアが立ち上げた「アートプロジェクト」が創作活動を通じて移民が対等の立場で参加できる場となっていることなど、遊びの創造と自治体行政の支援について述べた。

「第5章 キャリア形成と自己実現」では、移民や難民にとって新宿が働く場を提供し、キャリア形成と自己実現の場となっていること、ひいてはそれが人生の展望を可能にし、定住への途を拓いていることを記述した。新宿は移民の在留資格や言語的能力を問わず受入れてきたことにより移民や難民の求心性を深め、路地裏のニッチ・ビジネスの進展や多様なエスニック・ビジネスの起業に繋がった。バブル経済の崩壊、リーマン・ショック、東日本大震災など不景気や不安定な状況下にあっても、新宿の外国人登録者数が減少しなかったが、その要因を自己実現の側面から論じた。

「第6章 社会参加と呼応するまちづくり」では、戦後の在日韓国・朝鮮の人びとのコミュニティ形成、および住民との接触を検証した。住民としての平等な権利を追及する中で、新宿区役所では指紋押捺拒否が始まり、その後、多文化型まちづくりにどのように展開していったのか、それが新宿におけるエスニック・コミュニティの形成といかなる関連

をもって展開されてきたか論じた。今日、新宿区多文化共生まちづくり会議は外国人の区政参画への途を拓き、ともに生きる住民への生きがいの提供を模索していることを述べた。

「第7章 人生の統合と加齢の価値」は、移民の高齢化にともなう様々な問題について考察した。そこでは異文化間介護という新たな視点の重要性とともに、外国系介護福祉士のもたらす可能性に注目したが、移民の受容とは、移民の人生を受け入れることであるという見方への回帰が常に要求されることを確認した。

老齢期を迎えた移民、外国籍受刑者、難民などへの心的ケアをあつかった「第8章 とともに折り弔う」では、新宿に存在する外国籍受刑者への読み物提供活動、難民申請者のセイフティネットとなっている NPO 団体や宗教施設の活動を分析し、これらが安らぎの場を提供し、心的ケアや適応教育など多機能な役割を担っていることを論じた。移民があらゆるライフステージで危機に直面する時、地域に幾重にも創設されてきた NGO/NPO がネットワークをもつことによって行政から見落とされがちな移民をケアし、多文化都市としての新宿を支えていることを明らかにした。

「第9章 新宿のルーツと歴史の練磨」は、いわゆる異質な人々を受け入れてきた新宿の包容力を過去に遡って検証した。新宿の多文化化のルーツは、明治の初頭から宣教師、教師、留学生、亡命者、難民など多様な外国人を篤志家が家庭内に受容したことに始まっており、日本初の国際結婚が生まれたのも新宿だった。明治期の国際結婚や孫文などの亡命者や中国人留学生のエピソード等が今日までさまざまなレベルで共感をもって伝承されており地域に共有されている。これは、新宿区歴史博物館が情報の共有と歴史の風化を防ぎ多文化意識の醸成するプロセスとして伝えていることも指摘した。

最終章では、以上のまとめとして、新宿は歴史的な多文化的土壌の上に、近年の急激な多民族化のもたらした混乱の中でも異文化間トランスを育み、逆境にある移民や難民に手を差し伸べてきたことを再確認した。移民コミュニティは自立につながるエスニック・ビジネスの経験を蓄積しトランスナショナルなビジネス空間を形成した。新宿区は、オールドカマーとニューカマー、難民と地元住民の代表者会議を設置し、区政への参画を実現している。そこでは移民や難民の生活に寄り添う議論がなされ、不可視な存在になっている不就学問題の解決や「市民権」について語り合う場が創造されており、課題を抱えながらも「多文化都市」としての成熟期を迎えようとしている。他方、多文化化の歴史を地域の記憶として語りや博物館活動を通して受けついできた新宿の多文化都市としての根源の深さを確認した。

多文化都市は、人の移動とグローバル化に絶えず連動・変化し、固定化した完璧な多文化都市はありえないと思われるが、移民や難民の人生に寄り添う視座をもち、葛藤や軋轢の経験をプラスに活かす都市とも言える。新宿に暮らす様々な移民や難民のライフサイクルをオーラル・ヒストリーに基づき検証することで見えてきたのは、新宿が多くの課題を抱えながらも、移民や難民の社会参加、区政参加を促し、市民権の拡張に向けて取り組むなど、多文化都市の諸条件を徐々に満たしつつあることであった。以上から移民を受け入れて発展を遂げている新宿を、「多文化都市・新宿」と呼ぶことができると結論づけた。

本論文は多民族多国籍者（移民）の集住が顕著な都市、新宿の多文化性とその変遷の過程を、そこに住む移民とホスト側住民、地域行政および市民運動とのかかわりから明らかにしようとするものである。ここで筆者が、様々な属性、背景をもつ移民が地域にいかに住民として包摂されてきたかについて記述するため、有効な手法として用いたのは「ライフサイクルの視座」であった。「ライフサイクルの視座」は、人の誕生から幼児期・学童期、キャリア形成期、壮年期をへて人生の終末をむかえる老年期までの生き方と心の動きを、オーラルヒストリーに依拠しつつ包括的に分析しようとするもので、本論文を展開するうえでの核心的部分といえるものである。

序論で筆者は、まず本論文の目的について述べた後、調査対象とする新宿に関する先行研究との対比のうえで、本研究の調査方法や分析における特質を明らかにする。第1章は1990年代にはいり新宿で急増した非正規滞在の女性の出産に言及し、外国人妊婦をとりまく法制度、医療体制など諸問題が露呈する中、医療現場では医療通訳や外国語情報を提供し、異文化理解の観点からの出産支援がはじまっていたことを明らかにする。第2章では移民・難民の子どもたちがNGOや自助組織の生活、保育支援事業により支えられる一方で、地域や保護者自体に芽生えはじめた多文化意識に注目する。第3章は、様々な理由で就学できない子どもたちの実態をとりあげ、受け皿となった夜間中学や民間ボランティアの取り組みを分析する。第4章は移民にとっての憩い、娯楽の場の必要性について述べ、民間の支援活動や難民収容所での状況を明らかにする。第5章で筆者は労働の場としての新宿に注目し、移民の滞在資格を問わず、また社会の経済不況にもかかわらず、新宿がかれらを受け入れ、またエスニック・ビジネスをはじめ様々な分野での自己実現の機会を与えてきた要因を分析する。第6章は在日コリアンのオールドカマーとニューカマーがいかにコミュニティを形成し、生活の基盤を築きつつ、新宿の多文化都市化に参画してきたかを論じる。移民の高齢化にともなう問題を扱う第7章では、移民高齢者が増加する中、介護サービスの充実とともに異文化間介護の視点の重要性が指摘され、移民コミュニティが参与する多文化型介護や多文化型老人ホームの可能性について論じられる。第8章は新宿に多数存在する移民のための宗教施設や心的ケアをおこなうNPOの活動を検証する中で、それらが磁場として他によりどころのない移民・難民をひきつけ、安らぎの場を提供してきた事実を指摘する。第9章では新宿が明治期日本で最初の国際結婚の場となり、数々の亡命者や留学生を受け入れてきた歴史をたどり、それを地域の記憶として語りや博物館活動を通して受けついできた新宿の多文化都市としての根源の深さを確認する。まとめの最終章では、新宿は歴史的な多文化的土壌の上に、近年の急激な多民族化のもたらした混乱の中でも寛容性をはぐくみ、逆境にある弱者としての移民・難民に手を差し伸べてきたこと、そして移民コミュニティは自立につながるエスニック・ビジネスの経験を蓄積しトランスナショナルなビジネス空間を形成する一方、地域や自治体の働きかけに応じ社会参加への動きも活発であることを指摘し、新宿をあらためて多文化都市として結論付ける。

本論文は、新宿に生まれ育ち、その多民族化の過程を最短距離から観察しつつ、1980年代後半より移民の相談や支援にかかわってきた筆者が、かれらに寄り添い書き留めたオーラルヒストリーから包括的に移民の日常生活や人生設計を描き出した労作である。論考に

において移民の「ライフサイクルの視座」を主軸とするアプローチは、先行する新宿の多文化論や移民政策研究では容易に見えてこなかった部分を多く顕在化させた。これにより移民と都市社会との多面的な接点がしめされ、またライフステージごとに問題が整理された点は、今後の移民政策、移民行政にとって多くの示唆を含んでいる。また移民とは切り離すことができない越境移動が、かれらの日常生活や人生設計へ深刻で、場合によっては世代にわたる影響（多くはネガティブな）を与えていることを明らかにし、移民を取り巻く問題の深さ、複雑さを論証した点は評価できる。また、移民を労働力の補填、経済の下支え、あるいは受け入れ難民の数の一部としてとらえがちな、国家の移民・外国人政策に対し、かれらを、人権をもち感情や希望を抱いて生きる生身の人間としてみることの必要性を、本論文は新宿に焦点をおき、「ライフサイクルの視座」を通して分析することで、あらためて確認させた。新宿が多文化都市へ至る過程の分析において、様々な移民支援の組織、団体の活動が生成され、また行政の現場での施策が展開されてきた状況は、決して一枚岩とはいえない移民、あるいは住民とともに、それぞれの立場に固有の理念や理想、利害関係からでは語れない、柔軟で現実的な対応として、豊かな事例をもって描写されており、これが新宿多文化都市論を補強しているといえる。

一方で、本論文にはいくつかの問題も指摘される。「ライフサイクルの視座」はライフステージごとに多くの問題を可視化させたが、全体のストーリーとしては流れがあるものの、それを分割したことで、個人のライフステージにまたがるアイデンティティや習慣の変化への視点が弱まった可能性がある。また移民において適用された「ライフサイクルの視座」による記述が、都市の発展の軌跡とは十分関係づけられていない点も惜しまれる。筆者の新宿への思いはしばしば、行政の対応不足への批判という形で現れるが、その限界が逆に新宿での市民や NGO による支援を充実させてきたという側面への目配り、また新宿においてニッチを利用するビジネスが興隆する事実は、移民の社会参加を拒んできたことの裏返しではないかという問いかけも望まれる。

とはいえ、これらは、筆者が膨大な調査研究の蓄積を基に、そこに住む移民の「ライフサイクルの視座」を主軸として提示した新宿の多文化都市論の価値をそこなう問題ではない。総合的に判断して、今後のさらなる発展、充実への可能性を内包した本論文は、全員一致で博士の学位を授与するに値する論文であるとみとめられた。